

私の保育

—— 雑感 ——

岩 本 典 子



(I)

私は朝の公園が好きです。なぜなら、電車を降り、公園を通り抜けて幼稚園に向かうこの時間は、まさに一日の始まり、と思うからです。舗装されていない小石の転がる道を歩く時、何本もの大きな木の間を通る時、そしていつの間にか裸だった木にあおあおとした葉が繁り、花の蕾を見つけた時、私はそこに自然のもつ暖かみを感じるので。どんなことでも全てを包みこんでくれる暖かみを。

その公園の中にあつて、ある時は水のはった水たまりの表面を靴の先でそっと押してみます。ベリッと亀裂の入る感触を愉快に思いながら——。ある時は目をつぶり両手を拡げて何歩、歩けるか等と馬鹿な試みもします。一つの小石を追いかけて蹴り続けてみたり、時には、今日の子どもの達の顔を思い浮かべながら……又昨日の活動を思い出しながら……。私にとつて沈んだ気持ちもはずんだ気持ちもイライラする心も、いつも暖かく受け容れてくれる朝の公園です。

この公園を抜けて少し歩くと、武蔵野の住宅地の一角に小さな幼稚園があります。多くの子ども達を育て、そして今、

八十名の子ども達と共に私のことも見守ってくれる愛する幼稚園です。

学校を卒業して、憧れの幼稚園の先生になれたのは五年前のこと。初めて「い、わ、も、と先生」と呼ばれた時の気恥ずかしさと戸惑いは今でも思い出すと私の心に、ある緊張感を与えてくれます。それは、十六年間続いてきた生徒業、つまり、教えてもらう立場から突然、教える立場となった故に起こった緊張感かもしれません。

幼ない頃から、先生という人物に威圧感を覚え、いつも小さくなって自分を思い浮かべると、私にとっての先生の存在は、人間である前にまず、先生であった、とさえ思えてきます。

この五年間で私が心がけてきたことは、先生であるがために出てくる甘えをまず捨てようということでした。大人だから、或いは先生だからという一種のカサをかぶった状態を捨て、子ども達の前に、一個の人間として立っていかうと思えました。

そして、子ども一人一人と接していくうちに改めて生まれてきた疑問は、「幼稚園とは一体、何であるか」「子ども達にとって幼稚園はどういうあり方がふさわしいのか」というこ

とでした。けれども、この問題はすぐに解答が得られるものでもなく、今すぐ、結論を出そうとも思っていない。ここでは、毎日の子ども達との関わりを通して、そこで感じたことを改めて自分の中で問いなおし、試行錯誤していきながら考えていけたら、と思うのです。

(II)

年少男児Aは気の弱い子どもであった。新しい物事に対して常に不安を覚え、その前に立っては手も足も心の中までもが固まってしまっているのが私にも感じられた。友達との交わりにおいても、「おまえは、なくからいれてやらないよ」とこのような状態はますます仲間に入れてもらえない不満をかきたたせ、Aの不安をつのらせていった。自分でもどうにもしきれないイライラがそこに生じ、どこに居ても自分の居場所が見つからない風で落ち着かなかつた。

私までもが焦りを感じ、保育者という立場で、何とかしてあげなければ……どうすればよいのか……と気負った。この時の私とAの関係はまさに先生(大人)とAであり、

それは私自身をAの心の内面にまでほり下げて、Aと共に感じ合える先生ではなかったようである。Aも私に近づいてくることをしなかった。

夏休みに入り、Aの心にどのような変化があったかは解らないが、二学期にAが自ら見つけた居場所は「絵を描くこと」であった。茶色の絵の具を筆にたっぷり浸こませ、紙に向かってスーッと線を引く。平行してもう一本引く。そして二本の線を何本もの短かい線で結ぶ。もう一枚紙を取ってきて、再び同じものを描く。今度のは二本の平行線がゆるやかなカーブを描いている。もう一枚、もう一枚、後から後から茶色の筆一本でスーッとチョンチョン／＼の絵が生産されていく。後から後から同じような絵が産まれた。

そのAの前で私が出来ることといったらAにマイナスになると思われる言葉を避けることであり、ただひたすらに見守ることだけであった。そして後は何枚も何枚も出来上がってくる二本の線の端と端を継ぎあわせてみることに、それだけであった。Aによれば、それらは全て、電車の線路であったのである。その線路は途中で切り換えしがあったり、二又に分かれたりしながらも延々と続いた。廊下に

貼りきれずにホールにつなげて貼った。二十枚は越えていと思う。

それから何日間もAは線路を描き続けた。そしてある日、茶色の線路は青いゴミ清掃車へと変わっていった。

その時、私はAの心の開きを垣間見た思いがした。残念ながら私に向かっての心の開きではなかったけれど……。一枚の紙に対しての大きな心の開きであった。そして開かれた入口から線路が生まれ、どこまでも果てしなく止まることを知らないかのように一気に描きあげていったAを見て、長く続いたAのイライラも私の困った保育者としての焦りもこれでオワリ、という気分になった。

(III)

以上は二年前の私の体験をもとに書いたものですが、二年以上たつた今、この時の私の感じた中にどこか納得し得ない点を見るのです。今、改めて、私が安心して終わってしまつたことが良かったのかどうか、と思えてくるのです。Aの心の開きとは、本当にこのことだったのか、一心に紙に向かって線

路を描いていたAの状態を真に心の開いた状態とみて良かったのかどうかと。

ここで考えなければならぬことは、心の開き、とか心を開く、とは一体どういうことなのだろう、ということです。そして、それは前に述べた「幼稚園とは一体何であるのか」の疑問とどこかで結びついていくような気がしてくるのです。

「心を開く」という言葉を考えた時にここにはいろいろな要素が含まれていると思います。例えば、心をゆるす、とか心の安定（自分の居場所がある、ということ。そこで打ちこむことが出来るということ）とか。これだけを考えるとAの場合も確かに紙に向かって心をゆるしていたし、そこに自分の居場所を見出していたといえるのですが、それは、他者との関わりという面からいえば、あるいは「心を閉ざした」状態であったのではないかと思うのです。

私達保育者は、子どもが一つの物事に熱中して取り組んでいる姿を幼稚園の様々な場所に見ることが出来ます。絵を描く、物を作る、本を読む等はそうすることの出来やすい一つの活動だと思えますが、それらの「物」に向かって心が引き込まれ、その世界に深く浸り込んでいく、ということとは（極

端な言い方になりますが）他者との関係を断ち、それによって自分と物との世界に安定を求めていることになるのではないのでしょうか。

人は、人と関わっていく中で、一層豊かな心の開きを覚えていくものと思うのです。とすると、私が「物に向かって心を開いた」と表現したのは適切ではなく、むしろ、他者との交わりにおいては、心閉ざした状態であったと考えるところにAにとっても私にとっても次への出発があるのではないのでしょうか。つまり、他者に心閉ざす程一つの物事に熱中するということは、これから外に向かって心を開いていくための一つの準備段階である、と思います。ある活動に十分な時間をかけ、それが心ゆくまで満たされると、次の新たな活動へと移っていく子ども達を私達は多く見てきています。それは決して「心を閉ざす」という閉鎖的な見方ではなく、他者や他の物に対して心を拡げていくために、自己に秘めたるものを育てていっているのだと思わずにはいられません。Aの絵が線路からゴミ清掃車へと変わっていき、後に彼が絵を描くことによって自信をつけ、友達からも認められ、そして仲間との交流がもてるようになった、ことを考え合わせても一層、その思いは深まります。

さて、もう少し考えてみると、それでは保育者である私にとって、心を聞くとはどういう姿勢を意味するのか、という問題が起こってきます。

それは、子ども一人一人の個というものをありのままに受け入れていこうとする姿勢だと思えます。子どもの持っている価値感を大人の価値感で決定していくのではなく、子どもがどのような時に生き生きしてくるのか、又、どのような時に本当に自由なのかをよく見極め受け入れていく柔軟な心と頭がそこに必要とされてくるのではないでしょうか。それは、子どもとの距離をちぢめることにもなりますし、共に活動し合える状況を作り出すことにもつながってくると思います。このことは、子ども達と接する保育者にとって最低条件なのではないか、大人の価値感に従わせようとする時子どもの心は決して開かれることはありません。この条件が満たされた時に、初めて子どもも心を開いてくる、と確信を持つのです。

子どもはこちらが子期せぬ時に、体ごと飛び込んでくることがあります。その突然の体当たり面に面喰らうこともしばしばですが、そこでの私の役割は、両手を拡げるまでの余裕はないにしても、せめてしっかりとその子どもを受けとめてあ

げることだと思うのです。もし私がスルリと体をかわずようなことをした、とすれば、彼らは勢い余って他の何か障害物にでもぶつかるか、さもなければ、ぶつかりの対象がなくなることによって行き場のない戸惑いを感じるのではないのでしょうか。例え、その体当たりが突然のものであったにせよ、子どもに対して心の開いていた保育者とそうでなかった保育者とは、子ども自身をありのままに捕えることにおいて大きな違いが生まれると思います。そしてそのことは子どもが小さな胸の或る部分をほんの少しでものぞかせてくれることがあった時に、それに気づくことのできる保育者ともなり、見すごしてしまう保育者にもなる、こととつながってくるのではないのでしょうか。

このようにしてみると、私達は生きた子ども達に対して、いつでも心を開いて接することが余儀なくされてきます。何故なら、それが子どもらと共に歩むことにもなり、子どもらと共に感じ合える者ともなるからです。それらの基盤の上に立って、信頼関係が育っていくのだ、とつくづく思います。

(IV)

さて、私が毎日の保育の中で感じ続けてきた「幼稚園とは一体何であるのか」「子どもにとって幼稚園とはどのようなあり方がふさわしいか」という問いかけも私なりに考えがまとまってきつてあります。勿論、まだまだヒョッコの私に、この無限の拡がりを見せ底をつくことを知らない幼児教育の、あるべき姿などは臍気にもつかめるはずありませんが五年目を迎えて、今、私の考えていることを記しておくのもこれからの私と子ども達との関係に何かの形で役立つかも知れない、と思いつつ。

私なりに結論を出すとなれば、「幼稚園は子ども達が生活をしている場である」とこのようになるのです。今更言うまでもない、と思うのですが、子ども達と接しているとやはり、この言葉しかないのです。

生活をしている以上、そこには他者とのぶつかり合いも生まれますし、何をしてよいのか見つけ出すことの出来ない状態もあるでしょう。けれども、幼稚園という場が、子ども達一人一人の個を真に認め、尊重していく場であったとすれば、どの子ども達もその中で彼らが持ちうる価値を存分に育て、確実に成長していくのではないのでしょうか。

それを私達大人はわかっているつもりなのに、ある時、ど

こかで、知らず知らずのうちに、子どもを大人の価値基準の中にはめこんでいこうとしているのではないのでしょうか。大人の価値の枠の中に子どもを押し込み、自由な真に子どもらしい、内なる生活のあり方を忘れあつかも子どもの外的要素のみを求めて自己満足に浸っているように思われるのです。又、子ども達も、既成されたものを受け入れ、それがあたりまえだと思ってしまうて、何故という疑問を持たないのは恐いことだと思えます。

現代の大人社会において既成概念が安定を示すのに対して、子どもは一切それらのものに捕われず、どろどろとした生活の場の中で、自由な生き生きとした発想を産み出して安定を求めていって欲しいと願います。

そして、これらの空気で満ち満ちているのが、「幼稚園」なのではないかと思えます。

私は、そのような幼稚園の中で、子ども達と共に歩み続けながら、一方において、保育者としてのあるべき姿を考え続けることが出来れば、と願っています。思うこと、と実行すること、が一向に伴わず、子ども達を前にしてまごまごしている私なのですが。

(東京・武蔵野相愛幼稚園)